

令和 4 年 6 月 6 日現在

機関番号：32680

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K17526

研究課題名（和文）がん化学療法の痺れの現れを捉える現象学的研究 オノマトペを用いた評価指標案の作成

研究課題名（英文）A phenomenological study to understand the appearance of numbness in cancer chemotherapy; Development of a draft evaluation index using onomatopoeia

研究代表者

坂井 志織 (SAKAI, Shiori)

武蔵野大学・看護学部・准教授

研究者番号：40409800

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：がん化学療法により生じるしびれは、他の激しく明瞭な症状が周期的に現れることが前面に経験されることで、背後に退き発症の自覚を難しくさせていた。しびれの表現でよく耳にするオノマトペはまだ名付けられないしびれを探り表現する装置として機能していた。初めて自覚するしびれでは、オノマトペ表現の間はまだしびれという自覚はなく、断片的な違和感が継続的になったことを契機にしびれと自覚されていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

感覚の違和感を自覚するだけでなく、持続という時間幅を含むことが「しびれ」を症状として成り立たせる背景としてあることがわかった。初めて治療を受けている患者にとっては、自らの身に起きていることをすぐに医療用語に結び付けるのは難しい。だが、その間も違和感として感じられており、オノマトペが出現する時期から対話的に関わり、しびれとして早期に自覚することが慣れに繋がる第一歩になると言える。

研究成果の概要（英文）：The numbness of cancer chemotherapy backed off and made it difficult to recognize the onset of the symptoms, as other intense and distinct symptoms were experienced in the foreground of the periodic onset of the symptoms. One often hears onomatopoeia in the expression of numbness. It functioned as a tool to explore and express a numbness that has yet to be named. For the first time, there is still no awareness of numbness during onomatopoeic expressions. The patient was aware of numbness when the fragmented discomfort became continuous.

研究分野：成人看護学

キーワード：しびれ がん化学療法 現象学

1. 研究開始当初の背景

申請者はこれまで中枢神経障害によるしびれの研究に長年取り組み成果を積み上げてきた(坂井、2017;2016;2008)。その中で、がん化学療法により高頻度にしびれを併発することを知り、2016年よりがん患者を対象にした研究を実施し、生活経験の意味づけを質的に探究した。調査の中で患者らが共通して語っていたのは、複数生じる有害事象の中で、しびれをそれとして自覚することの難しさであった。突然発症する中枢神経障害とは異なり、ゆっくり発症することが自覚しづらさの背景であると考えられる。他方で、はっきりとは言語化しづらいながらも、何らかの違和感としては感じており、比喻や「ジンジンする」などオノマトペで表現されていたが、言語表現を定性的評価に繋げるような研究はいまだなされていない。このような特徴を含む経験は、前言語的な経験に迫ることができる現象学的アプローチが適しており、これまで明らかにされていない“しびれの現れ”を捉えることができると考えた。

がん化学療法に伴うしびれについての研究は少なく、(Toftthagen et al.,2011;武居他, 2011;三木・雄西, 2014)、患者がどのようにしびれを経験しているのか十分には明らかになっていない。近年、質的記述的方法により抗がん剤による「しびれ」の日常生活への影響(武居他, 2013)や「しびれ」が及ぼす心理的ストレスへの影響(京田他, 2013;藤本他, 2013)を扱った発表がみられているが、しびれ未経験者を経時的に追いつながら“しびれの現れ”を明らかにする試みは未だなされていない。

オノマトペは言語学分野で研究されており、日本語には約4500語あり他の言語と比べ圧倒的に多く(小野編著、2007)、我々の日常生活に深く浸透していると言える。言語学以外では、オノマトペとジェスチャーの関連を捉える人間行動学領域の研究(細馬、2011)や、それを基盤にした言語化しづらい介護における相互行為の分析がなされ、新たな知見を提示している(細馬、2016)。看護学領域ではオノマトペを手掛かりに患者経験を理解する研究は見当たらず、本研究の着眼点は新規性があると考えた。

2. 研究の目的

がん化学療法を継続的に受け始めた患者が、治療経過のなかで他の有害事象と併せてしびれをどのように経験しているのかを、現象学的記述で明らかにすることが目的である。

3. 研究の方法

本研究はがん化学療法の経験者6名を対象とした予備調査と、がん化学療法を継続的に受け始めた患者9名を対象とした本調査からなる。

(1) 予備調査：2018-2019年

乳がんに対する化学療法により、しびれを経験した患者6名に非構造化インタビューを実施した。フェイスシートを用いて治療経過等の確認を行い、次に「化学療法によるしびれを含む有害事象についてお話しください」と質問し、そのほかは研究参加者の自由な語りに任せた。インタビュー時間は1-2時間であった。分析はしびれの経験について、振り返っていかに語られているのか、しびれの出現、その時のオノマトペに着目し現象学的分析を実施した。

(2) 本調査：2020-2021年

研究協力施設に協力者募集のポスターを掲示し、化学療法を継続的に受け始めたしびれ未経験者を対象に継続的な面接調査を実施した。協力者は9名であり、非構造化面接では「化学療法による体調の変化など、からだのことで気になることは何かありますか」と質問し、そのほかは研究参加者の自由な語りに任せた。経時的な変化を現象学的に捉えるために、数か月に1回の面接を約1年間継続し、生活の中で気になったこと等は日誌法によりデータ収集した。分析は、しびれの経験について、他の有害事象や治療の経過のなかでいかに語られるのか、語られないのかを身体経験やオノマトペに着目しながら現象学的に分析した。

4. 研究成果

(1) 主な成果

① 予備調査の成果：複数の有害事象を経験する身体におけるしびれの気づき方

【目的】がん化学療法を継続的に受けた患者が、治療経過のなかで他の有害事象と併せてしびれをどのように身体として経験していたのかを、現象学的記述で明らかにすることを目的とする。

【方法】スノーボールサンプリングを行い、化学療法によるしびれの経験者6名を参加者として、非構造化インタビューを実施した。分析は参加者ごとに現象学的に行い、化学療法の治療経過の中で、しびれをどのように身体として経験したのかを記述した。所属大学(承認番号18027)の倫理審査を受け承認を得て実施し、患者には口頭と書面を用い承諾を得た。

【結果・考察】化学療法によるしびれは、急激に発症する中枢神経障害とは異なり、薬剤の蓄積によって時間をかけて生じるため、症状の出現を医療者・患者ともに捉えづらい。また、倦怠感や浮腫など様々な有害事象も混在するため、自身に起きていることが何に起因するのか、はっきりと特定することが難しい。

患者らは、有害事象の中でも吐き気や脱毛、倦怠感などについては、いつ・どのように始まり、どんな状態にあったかを明瞭に語っていた。他方で、むくみや皮膚障害、しびれについては「いつからかよく覚えてないんですけど」と、始まりが不明瞭であり、「ああ、これがむくんでいたということなんだと、後でわかったみたい。」と症状の消失により、以前あった症状に「むくみ」という言葉が後から与えられていた。さらにしびれについては、「なんか変な感じがするな、いつもと違う感じがするな」といって、それがしびれだとは思わなかった。「これをもってしびれと言うんだよというふうに言われなかったら、私はこれをしびれというふうに言っていないかもしれないんですけど、何か嫌な感じがするんですみたい。」と、身体として感じていることに「しびれ」という語を当てはめる難しさが生じていた。加えて、むくみと共に経験されていたことで「今何かを感じたのが、むくみの方なの？しびれの方なの？と言われると分からないかも。」と、両方の症状が同時期に生じていたことで、よりしびれをそれとして特定することが難しくなっていた。

以上のことから、吐き気など激しく明瞭な症状が投薬周期に合わせて波のように押し寄せては引いていくことを繰り返す中で、蓄積性のしびれは背後に退き、発症の自覚を難しくさせていたことが記述された。

【示唆】既存の様々な指標では、それぞれの症状毎に評価を行う形式がとられている。だが、生活者としての視点に立つと、複数の有害事象が分けられて経験されているのではなく、生活という時間の中でしびれも含め一連の経過として経験されている。そうであれば、既存の評価方法のように患者の経験を症状ごとに取り出し評価するのではなく、他の有害事象と共にどのように経験されているのか、包括的な視点で事象を捉える必要がある。

② 本調査の成果：がん化学療法によるしびれの成り立ち—オノマトペから「しびれ」になる経験

【目的】がん化学療法継続中に感じる症状が、どのようにしびれになったのかを現象学的記述で明らかにすること。

【方法】消化器がんに対する維持療法として化学療法継続中の参加者 9 名に非構造化面接と日誌法を実施し参加者毎に現象学的分析を行い、化学療法の治療経過の中で「しびれになる」経験を記述した。所属大学の倫理審査の承認（番号 18027）を得て実施した。

【結果】がん化学療法によるしびれは、薬剤の蓄積によって時間をかけて生じ、様々な有害事象に紛れその出現を医療者・患者ともに捉えづらい。その捉えづらさには、しびれは最初からしびれとして自覚されるのではなく、ある時から「しびれになる」という経験が含まれていたことが分かった。患者らは治療前に、医師から有害事象のひとつとしてしびれが生じることを伝えられていた。先行する知識により、物に触れた時の「ビリ」「チリチリ」という一瞬の感覚を違和感として日誌に記録しながらも、「しびれ」にはなっていなかった。断片的な違和感が続く中で、「あ、これがしびれかと感じた」と継続的な違和感を自覚したことが「しびれ」と名指すことを可能にさせていた。当初オノマトペで多く記載されていた感覚は、「指先しびれ？」としびれとしての輪郭が現れてからは、「しびれ」という表記に代表され、次第に「しびれ感に慣れてきた」という記載も散見されるようになっていった。

【考察】感覚の違和感を自覚するだけではなく、持続という時間幅を含むことが「しびれ」を症状として成り立たせる背景としてあった。また、オノマトペはまだ名付けられないものを探る装置として機能していたことが分かった。しびれの早期発見のためには、オノマトペを手がかりに対話的に関わり、気付きを見逃さないことがケアとなる。さらに、しびれとして早期に自覚することが慣れに繋がる第一歩になると言える。

(2) 研究成果の位置づけとインパクト

本研究では、患者がどのようにしびれを経験しているのか、どのように自身の身体で感じている症状をしびれとして自覚するのかを記述的に明らかにした。そこには化学療法の特徴でもある複数の有害事象をひとりの身体で多層的に経験することによるしびれの気づきにくさや、症状の出現や減退が明確ではなくちょっとした違和感とも言えることの積み重なりが、しびれと自覚する前の経験として目印になることがわかった。

また数量的な計測に傾倒しがちであるが、オノマトペという言語表現を指標として目に見えづらいしびれを患者—看護者で共有できる可能性が拓かれた。それには自由記載でオノマトペを促す日誌法の有用性があった。症状の有無だけではなく、患者の日ごろの気づきを医学用語ではなく、患者の日常の言葉で記す重要性が再発見されたと考える。

(3) 今後の展望

研究成果は今後学術論文として投稿し、さらに医療現場や患者に成果を還元できるように、パンフレットや事例をストーリー形式にしたブックレットなどを作成することを検討している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 坂井志織
2. 発表標題 がん化学療法によるしびれの成り立ち - オノマトペから「しびれ」になる経験
3. 学会等名 第41回日本看護科学学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Shiori Sakai, Tomoko Hosono, Michitaro Kobayashi, Testuya Sakakibara, Minoru Sugibayashi, Mayumi Kikuchi, Yoshinori Takata, Satomi Fukui
2. 発表標題 A Phenomenological Description of the Experience of Suffering from Long-term Chronic Disease: The Structure of Living with Illness
3. 学会等名 23rd EAFONS (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 坂井志織
2. 発表標題 複数の有害事象を経験する身体におけるしびれの気づき方
3. 学会等名 第39回日本看護科学学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------